The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大阪大学西洋史学会若手セミナー　活動記録 : 2021年1月～2022年12月
Author(s)	
Citation	パブリック・ヒストリー. 2022, 19, p. 80-84
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87103
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学西洋史学会若手セミナー　活動記録

2021 年 1 月～ 2022 年 12 月

報告要旨

（所属等は報告当時のもの。すべてオンライン開催）

第 72 回例会（2021 年 5 月 12 日）

「戦間期の日印ガラス工業の競争と協調―インド関税委員会ガラス工業報告書からみる 1930 年代日印の二重構造」

玉村紳

（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程）

①第一次世界大戦を画期とした、欧州ガラス製品の後退は、日本製品のインド洋海域市場への輸出拡大と、インド製品の内陸市場での輸入代替を促したが、「距離の壁」と輸入品であるマガジ・ソーダや坩堝等の製造コスト差をからなる、日印の製品価格によるインド市場の二重構造が出現した。

② 1920 年代後半から、生産および輸送コスト競争に加え、為替レート変動で日本に対し苦境に立たされたインドのガラス工業は、関税委員会に保護政策を求めた。

③ 1932 年に関税委員会は「緊急輸入制限」相当の裁定をしたが、インド政庁は「選別的保護」の 3 原則に反するとして拒否し、事実上の自由貿易を維持した。その帰結として、インドは 1930 年代末まで、日本のガラス製品最大の輸入国であり、その貿易の大半はインド商人によって担われ、インド市場の二重構造は 1939 年まで維持された。

第 73 回例会（2021 年 7 月 28 日）

「8 世紀都市ローマにおけるパウルス 1 世による聖遺物移葬―先行研究の整理と考察―」

小銭杏士郎

（大阪大学大学院文学研究科博士前期課程）

本報告では、教皇パウルス 1 世（757-67）が都市ローマにおいて行った聖遺物移葬に注目し、各事例と先行研究の整理を行い、また自らの予備的考察も踏まえて論じた。

彼が行った三つの移葬に対し、先行研究は主に、聖遺物の安全確保と、カロリング朝のピピンとの関係継続・強化という二つの解釈を行っている。その妥当性は高いと思われる一方、自らの考察においては、都市ローマ内での市民を対象とする地域政策であり、教皇による聖遺物を用いた権力・権威の獲得と都市支配者としての自己演出である、という議論を行った。

8 世紀は、都市ローマ・教皇権の位置づけが大きく変化した時期であり、先行研究では西欧中世史上の転換期であると捉えられている。そうしたより広い歴史的文脈の中に、パウルス及び後継の各教皇が行った聖遺物移葬をどのように位置づけることができるのかを考察することを、今後の課題としたい。

第 74 回例会（2021 年 8 月 24 日）

「アテナイ宗教史と女性史の発展

― Matthew Dillon, *Girls and Women in Classical Greek Religion* から J. Blok, *Citizenship in Classical Athens* へ」

藤﨑香奈子

（大阪大学大学院文学研究科博士前期課程）

ディロンは *Girls and Woman in Classical Greek Religion* (2002) で主に図像的史料に依拠し、全ギリシアの祭祀や宗教における女性の活動を扱い、古代ギリシアの女性が公的な場から排除されていなかったことを示した。それでは女性が活動した宗教とはポリスにおいてどのような場だったのか。ディロンは女性が公的に活動できた例外的な場として宗教を扱った。インウッドの “What is Polis Religion?” (1990) では、宗教はポリスの中心として扱われる。ブロックは *Citizenship in Classical Athens* (2017) で、アテナイ市民権の重要な基盤として宗教的領域で

の活動を扱い、政治や司法に参加できないことで市民でないとされてきた女性も男性と等しく市民であると主張する。ブロックの著作は宗教史や市民権研究に基づいたものである。しかし、女性が活動した宗教という場を例外的な場ではなく政治や司法と同じポリスの中心的なものとして捉え直す姿勢は女性史研究において大きな意義を持つものである。

第 75 回例会（2021 年 9 月 1 日）

「18 – 19 世紀転換期イタリアにおけるリソルジメント研究の可能性

— Lucy Riall, *Risorgimento : The History of Italy from Napoleon to Nation State* に基づいて」

金田彩

（大阪大学大学院文学研究科博士前期課程）

本報告では，*The History of Italy from Napoleon to Nation State* に基づいて，リソルジメントの先行研究を整理した。本書は，18 世紀後半から 19 世紀前半のイタリアが統一国家となる過程（リソルジメント）に関する膨大な議論を整理，検討したものである。また，歴史記述，政治，社会，経済などリソルジメントの諸問題をテーマ別に分類し，伝統的な歴史観から修正主義へ，そして新しい文化史への研究転換を詳細に説明している。この点から，リソルジメント研究に着手する全ての研究者の入門書となり，今後の基盤となることが期待される。

著者は，修正主義の立場に立ちつつその問題点を指摘し，近年の研究傾向である文化的観点での分析を高く評価している。また，文化的要素を取り入れたナショナリズムの視点からリソルジメントを再解釈することで，国家統一や民族統一の答えを導き出せると主張している。

「ドイツ第二帝国期の植民地政策・統治・実情

— 栗原久定『ドイツ植民地研究』にもとづいて」

松本捷

（大阪大学大学院文学研究科博士前期課程）

本発表は栗原久定著『ドイツ植民地研究』を書評するものである。本書は第一次大戦の敗戦によって消失し、以降深く顧みられたとは言い難いドイツ帝国のアフリカやアジア・太平洋植民地の実情と植民地統治について、植民地がドイツのみならず世界に与えた影響を示すことを目的としている。著者はドイツの植民地への関心を喚起することを目指し、図表や写真を用いて視覚的にドイツの植民地を概説している。印象深い歴史上の出来事の裏にある源流ともいうべき事象を浮き彫りにしており、ドイツ植民地研究に対して有用な面が大きい。一方で本書は概説書であり、数量・統計情報、地域間の比較・交流についての記述が少ない。また先行研究についても具体例があいまいであり、研究状況についてもこれからの研究に際しての基準として、より詳しく記載してもよかったのではないかと指摘した。

第 76 回例会（2021 年 12 月 10 日）

「膠州湾・青島植民地と東洋艦隊」

松本捷

（大阪大学大学院文学研究科博士前期課程）

ドイツ帝国はヴィルヘルム 2 世の元世界政策を遂行し、植民地獲得の他、皇帝直属の権力組織であった海軍の大幅拡張が行われ、ドイツは一気に世界第二位の海軍国家となった。その艦隊は本国の「大洋艦隊」、東アジア・青島を拠点とする「東洋艦隊」に大別される。また膠州湾・青島はドイツ海軍が直接統治した唯一の植民地であり、海軍の活動を象徴するものであった。

しかしながら、従来研究では海軍・東洋艦隊と青島植民地の民間との関連性があまり語られていない。本報告ではドイツ東洋艦隊が東アジア地域においてどのような活動を行い、在地ドイツ人、中国、その他国家にどのように見られていたのか

分析した。

青島は港湾設備の整理により中国内でも6番目の拠点貿易港となったが、歳入の多くは1897年からの10年で1億マルクにおよぶ本国からの補助金であった。一方、東洋艦隊は東アジア各地を巡航して交流と情報収集を行っていたが、その存在は在地ドイツ人の権益保護と軍事力の象徴であった。今後は本国にドイツ海軍・青島当局が本国に送った報告書を用いて、当局の植民地の実情に対する認識と海軍による統治の特殊性を分析する。

「古代ギリシアの宗教的領域で活動した女性の家庭的側面」

藤﨑香奈子

（大阪大学大学院文学研究科博士前期課程）

古代ギリシアの聖と俗、公と私は別々のものと考えられていた。しかしこの考え方は近代のバイアスを通したものであり、古代ギリシアにおいてはこの境界は曖昧であったと強調されるようになった。この境界の見直しを受けて、宗教や私的領域での女性の活動の意味も見直されるようになった。女性は宗教や私的領域でポリス全体のために活動していた。このような古代ギリシア女性の公的領域と私的領域の曖昧さを織物を通して検証できるのではないだろうか。織物の製造はギリシア女性の家庭内の生産活動であった。織物は女性によって神殿に奉納され、儀式で使われることもあった。公的領域、私的領域両方で織物は女性と切り離せないものだった。

「カスティリャ王国における騎士団組織から見る王国と騎士団―領域支配を中心に―」

常震宇

（大阪大学大学院文学研究科博士前期課程）

本報告はまずイベリア半島の騎士団組織を中心に、騎士団に対する幾つかの先行研究、その具体的な組織構造や王国内の他勢力との関係を紹介した。次に、イベリア半島の騎士団組織は主に地方修道会或は兄弟団から発展したもので、レコンキスタの進展と共にイスラム勢力との辺境地で大きな領域を支配するようになったことを確認した。今までの研究によれば、騎士団組織が辺境地の防衛と再植民において多大な役割を果たした。しかし、広大な領地を有する騎士団は王国においてはどのような存在であったのか。また、騎士団の存在を中世の社会・国家制度においてどのように理解すべきか。これらの問いに対して本報告では、騎士団を通常の封建的な要素を持つ封建領主と決めつけるのではなく、イベリア半島の特殊な背景で生み出された騎士団領と騎士団の領域支配を検討し、中世社会・国制史における騎士団の特殊性を見出した。

若手セミナー特別編（2021年12月15日）

「確認しよう！　註と書誌情報の正しい書き方」

福永耕人

（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程・司会及び資料提供）

野口駿之介

（大阪大学大学院文学研究科博士前期課程・資料提供）

研究者にとって、註と書誌情報の書き方に関する正しい知識は、自らが学術論文を執筆するに当たっても、他者の原稿の査読や校正を行う際にも、必須となる。しかしながら、体系的に学習する機会は決して多いとは言えず、現状では個々人の努力に委ねられている感がある。また、専攻分野や執筆言語によっても、いくらかの違いが存在する。若手セミナーでは、参加者同士でこれらの規則や慣習について、確認する機会を設けることにし、特別編として開催した。

確認のための基本的な資料としては、大阪大学文学部西洋史学研究室の「2019年度卒業論文・修士論文執筆要領」を用い、これに加えて、福永が他の大学の史学科で用いられている資料等を用意し、比較参照が可能なようにした。その上で、野口の作成した論文を参加者全員で実際に見ながら、要項には記載されていない細かな点についても検

討を行った。本セミナーを通じて、註と書誌情報の書き方についての有益な知見を、参加者間で共有することができた。

第 77 回例会（2021 年 12 月 17 日）

「フィーニアニズムとカナダ社会におけるアイルランド系カトリックのナショナリズム」

真野有里子

（大阪大学大学院文学研究科博士前期課程）

研究対象であるフィーニアニズムは、場所・時代・政治事情に左右されて異なる歴史理解・表現をされてきたが、着目される点には以下が挙げられる。武力の是非・秘密主義、移民を介した大西洋横断のネットワーク、カナダ（英領北アメリカ）への侵略行動である。

フィーニアン・ブラザーフッドのカナダ侵攻を特異なものにする要因の一つは、英領北アメリカのカナダ人からの賛同を得ていなかった事である。問題提起に「なぜ、1850 ～ 60 年代のカナダでフィーニアニズムが広く受け入れられていなかったのか」を掲げ、二つの仮説を挙げた。一つには、カナダ社会のアイルランド系においては、フィーニアンと親和性のあるアイルランド系カトリック教徒が少数派であった点、二つに、政治家 Thomas D'Acy McGee によるフィーニアン弾圧の影響が大きかった点を挙げる。カナダにおけるアイルランド系の人々は合衆国のアイリッシュ・アメリカンとは移動時期・経済状態を違えている。David A Wilson の歴史解釈に留意すると、カナダにおける革命的なアイリッシュ・ナショナリズムと、McGee の関係に軋轢があることが判明した。

「8 世紀都市ローマにおける聖遺物移葬と「転換」」

小銭杏士郎

（大阪大学大学院文学研究科博士前期課程）

本報告では、8 世紀都市ローマにおける聖遺物移葬が、東方から西方へという都市ローマ / 教皇権の「転換」とどのように結びつくのか、という問いを考察した。また、本研究をさらに発展させるための新たな方向性も提示した。

既に 1980 年には、この二つが連動するものであるという仮説が示される一方で、後の研究はその具体的な実態に注目していない。報告者は以前にも、パウルス 1 世による移葬が都市における権力を獲得・強化する目的を持ったと議論したが、本報告ではその背景として、パウルスを中心とする親フランク派と、親ビザンツ派との対立が都市内に存在したことが、『教皇列伝』における移葬の記述から読み取れることを指摘した。

今後の方向性としては、教皇による建築事業、都市ローマの貴族、広い世界における都市ローマという三点を現状の可能性として説明した。質疑応答では、特に最後の点について多くの議論を行うことができた。

「リソルジメント期ピエモンテのアソシエーション― カミッロ・カヴールと農業協会 ―」

金田彩

（大阪大学大学院文学研究科博士前期課程）

18 世紀末から 19 世紀前半のイタリアは「リソルジメントの時代」と呼ばれている。1861 年にイタリア王国が誕生して以来，数多くの歴史家が議論を進めてきたが，未だに「リソルジメント」とは何であったのかという根本的な問いに答えを導き出せていない。近年，文化史への注目からアイデンティティとナショナリズムの研究が活発化しており，イタリア国家ではなく「イタリアらしさ」を明らかにしようとする書籍や論文が発表されている。

本報告では，第一に，現在までリソルジメントについてどのような議論がなされてきたのかを整理し，近年の潮流を把握した。第二に，イタリア内部の動きだけでなく亡命者や外交官との交流を考慮すること，つまり，政治・経済・社会などあらゆる活動の場となったアソシエーションに注目することを今後の課題として提示した。特に，ナショナリズムの高まりとともにイタリア統一の中

心となった北西部サルデーニャ王国ピエモンテ州に焦点をあてることで，新たなリソルジメント像を見出したい。